

茨城県立こども病院だより

令和2年3月10日 第49号



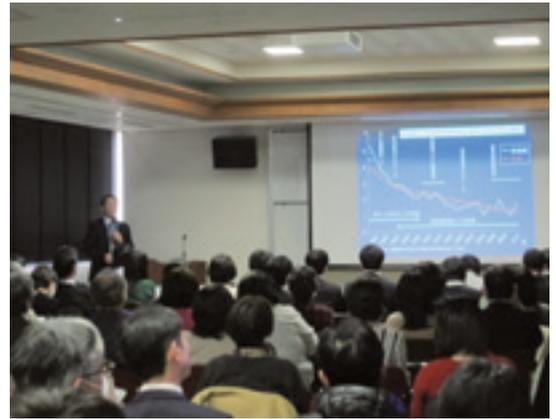
表紙写真：新生児救急車(ラッコ号)

指定管理者 社会福祉法人 済生会支部茨城県済生会

移行期医療と小児在宅医療に関するシンポジウム開催

テーマ：移行期医療

2月1日に当院主催で、第一部に各分野からの報告、第二部に国立成育医療研究センターの窪田満先生の特別講演を行いました。筑波大学をサテライト会場とし、院内外あわせて医師、看護師、相談支援専門員、保健師、行政、教員など広い職種から125名の参加があり、関心の高い課題であることがわかりました。第一部の中で、堀米医師が先天性心疾患の移行期医療の重要性、筑波大学付属病院での成人先天性心疾患診療立ち上げの経緯などを報告し、この分野で茨城県は先進的な取り組みがされていることが理解されました。平賀外来師長は当院における移行期医療支援の現状と課題について報告し、血液腫瘍疾患、外科系疾患の移行が難しい現状を説明しました。また、現在看護師主体で行っている移行期医療支援を多職種による支援に体制整備し移行期医療支援チームを立ち上げ、医療者や子どもとその家族に向けた研修会開催や情報提供をしていくことが課題としてあげられました。



窪田先生の講演では、「トランジション医療とは、小児科診療科から追い出すことでも、成人診療科に追い出すことでもない。成人期を迎えた患者一人ひとりにとって、最も適切な医療はなんであるか、どこで誰が診療を担うべきか、それらを患者、家族と一緒に考え、良い連携の中で、患者さんにとって最善の利益を求めていくことである」と話され、各県に移行期医療センターの設立が必要であると述べられました。

この5年間でも小児在宅人工呼吸器患者は増加しており、移行期医療の問題は今後更に重要な課題となることは間違いないため、今から対策を講じていく必要があります。当院でも、その重要性を認識し今回のシンポジウムを契機により積極的に移行期医療に取り組んでいきたいと考えています。

《シンポジウムのプログラム》

◎第一部 各分野からの報告（①から⑤の演者は当院職員）

- | | | |
|------------------------|----------------|---------|
| ① 小児がんの移行期医療 | 小児専門診療 副部長 | 小 林 千 恵 |
| ② 神経疾患・医療的ケア児の移行期支援 | 小児専門診療 副部長 | 田 中 竜 太 |
| ③ 先天性心疾患の移行期医療 | 小児神経精神発達科 医長 | 福 島 富士子 |
| ④ 当院の実態と看護支援 | 副院長兼医療教育局長 | 堀 米 仁 志 |
| ⑤ 医療・福祉制度（小児から成人へ） | 看護局 外来看護師長 | 平 賀 紀 子 |
| ⑥ 成人診療医からみた在宅における移行期医療 | 成育在宅支援室 MSW 主任 | 木 村 いづみ |
| | 大和クリニック 院長 | 木 村 洋 輔 |

◎第二部 特別講演 小児専門病院における移行期医療の問題点

講師：国立成育医療センター 総合診療部統括部長 窪 田 満

部門紹介

医療情報管理室



◆ 医療情報管理室の誕生

医療情報管理室の前身である院内情報ネットワークシステム管理室が誕生したのは、2011年（平成23年）2月28日電子カルテが導入される更に約2年前に遡ります。当時、病院側には医療系システムエンジニア（以下、SE）が必要という概念は無く、少しばかりのコンピューターの知識を持った当時放射線技術科次長であった私（写真右から3番目）と、医事担当者であった経営企画課中島主任（写真一番右）の2人で、専任者不在のまま、兼務として電子カルテ構築を目的としてスタートしました。

◆ 医療情報管理室が必要になった理由

20年以上前、専用の医事コンピューターのみが稼働している時代では、医事担当者が頑張ればレセプト業務は上手いきました。しかし、その後オーダーリングシステムが採用され、院内にパーソナルコンピューター（以下、PC）が数多く配置されると同時にPC間を接続するネットワークが導入されるようになると専門の知識が必要になってきました。そして、複雑な電子カルテ（電子カルテ・医事システム・複数の部門システムなどが相互に連携する複雑なシステム）へと進化してきた現在では、メーカー側のSEに的確な病院側の希望を伝える通訳とメーカーの言いなりにならない為の盾が必要になってきたのです。

メーカーの技術者は実は電子カルテを開発していても医療のプロではありません。病院側の技術者（医師、看護師など）もまた医療のプロではあってもコンピューターのプロではありません。このプロ同士の意思疎通を円滑に図るための通訳、そして専門用語で固められた高価な機器の導入を円滑に進めていくためには、医療系のIT技術者が病院側にもどうしても必要になってきたのです。こんな経緯から発足し発展してきたのが医療情報管理室です。

◆ 自己研鑽

我々に課せられた課題を解決するためには、メーカーの技術者に負けない知識を習得することは難しくても、せめて対等に会話ができる程度の知識は必須です。日頃から医療系のIT技術者として、国家試験、民間試験、学会認定試験などを積極的に取得したり、学会などに参加するなどして最新の技術や知識を常に習得するよう努力をしています。

◆ 今後の目標

現在でも業務の中心が電子カルテの維持管理、機能更新であることに変わりはありませんが、最近ではIT技術を利用した機能向上や効率的なデータの運用を望む声が増えてきています。ところが病院というところは、実は非常に効率の悪いデータ管理を行っているという構造上の問題があります。職種毎・部署毎では様々なデータ活用が考慮されていても、職種間・部署間での連携ではあまり活用されていないことも多く、結果として、異なる部署で同じデータを重複して入力していたり、適切なデータ入力や管理ができていない事例が数多く発生しています。

今後は我々が様々な業種や部署と協力し、効率よいデータ収集、無駄のないデータの管理、積極的な二次利用をお手伝いできればと考えています。そのためにはデータを入力する前の段階で是非我々に相談してください。最終的にどのような情報が欲しいのかを明確にし、データの入力方法から検討していく大切さをお教えできれば幸いです。

（医療技術局次長兼医療情報管理室長 札 保廣）

『骨髄バンクを支援するいばらきの会』訪問

『骨髄バンクを支援するいばらきの会』訪問

骨髄バンクの普及啓発にあたっている「骨髄バンクを支援するいばらきの会」（つくば市 牛島英二会長）が12月21日（土）入院中の子どもたちにクリスマスプレゼントを届けに訪問されました。

サンタクロースやトナカイに扮装し、タオルやおもちゃのプレゼントを手渡したり、外泊中のお子さまのベッドに置いたりとクリスマスムードを盛り上げてくれました。

「メリークリスマス♪」の掛け声が聞こえると病室が明るくなり賑やかなムードに！

訪問について牛島会長は「つらい治療と単調な入院生活をおくっている子どもたちに、楽しい時間を味わってもらいたい。子どもたちが、サンタクロースやトナカイの姿を見て喜んでくれるのが励みになっています」と訪問の意図を話してくれました。

各種類のプレゼント準備、当日の汗だくの姿……
ありがたさや感動！感謝！と胸がいっぱいになります。
これからも訪問して下さることを願って……



こども病院のボランティア紹介

布の花

今回は、茨城県立こども病院に登録してある19のボランティアの中から「布の花」をご紹介します。

「布の花」は、現在メンバー5名で、月2回水戸市のボランティアセンターで活動をしています。こども病院での直接の活動はありませんが、こどもたちが安心・安楽に入院生活が送れるようとても大きな力を貸してくれています。

病院のスタッフが、こどもたちの入院生活で「こんなあったらいいな」と思う便利グッズを考案すると、そのグッズを布の花の方々が、こどもらしい柄や素材を選んで、スタッフの考案したイメージ通りに作ってくれます。出来上がったものは、こどもたちが、こどもらしく成長しながら治療を受けるために大活躍しています。

こどもたちのために布で花をさかせてくれる、そんなボランティアさんたちに感謝です。



保育室壁飾り



抑制帯一式



CVエプロン

《業務改善表彰の報告》

12月19日（木）に行われたクリスマスパーティーで、今年度の業務改善表彰制度の表彰式が行われました。今年度の表彰は8題（表）でした。その中で最優秀賞を受賞したのは、「DPC準備期間中に行った実地研修がもたらした成果」を発表した経営企画課でした。当院が2018年にDPC対象病院に移行する準備として中島係長を中心に他施設の視察・研修を行い、DPCへのスムーズな移行を実現し、「部位・詳細不明」率や未コード化率を減少させ保険診療係数の改善につなげたことが高く評価されました。その他の発表もそれぞれの部署で工夫を凝らしたもので甲乙つけがたい内容でした。

◆ 最優秀賞

・経営企画課（中島係長）
「DPC準備期間中に行った実地研修がもたらした成果」

◆ 優秀賞

・医療情報管理室（荒木副主事）
「ICU加算管理に必要なベットコントロール情報を共有するシステムの構築」

◆ 院長特別賞

・超音波診断室（浅井部長）
「①超音波診断室における高度超音波診断技術習得のための人材育成への取組
②夜間・休祝日における超音波検査遠隔診断システムの有用性」
・肥田副技師（小児総合診療部）
「安全、安心の病児保育所を創る」

◆ 奨励賞

・放射線技術部（本元専門員）
「担当者の育成、勤務体制&昼休み体制の工夫により、MRI予約枠を増加させた」
・栄養科・総務課（加藤科長、大高主事）
「非常食管理における経営改善ならびに効率化対策」
・臨床工学科（布村専門員）
「SP testerを用いたシリジポンプの定期点検による時間短縮効果の検証」

予防接種センター

あ ら わ 21

水痘と帯状疱疹のはなし

茨城県予防接種センター長 宮本 泰行

2014年10月より小児を対象に水痘ワクチンが定期接種として導入されたため、水痘の患者数は激減し、冬に流行し、夏に減るといった季節性もなくなりました。水痘と同じウイルスで起こる帯状疱疹は水痘に初感染後、神経節などに潜伏感染していたウイルスが再活性し、神経支配領域に時に疼痛を伴う水疱が集簇して出現する疾患であり、皮疹の治癒後に発症する帯状疱疹後神経痛も問題となります。

帯状疱疹は、水痘の既往があれば誰でも発症する可能性があります。高齢者に多いですが、若年者でも過労やストレスなどにより発症することがあります。

従来帯状疱疹は水痘患者との接触が減る夏に多く発症していました。この疾患は水痘に対する液性免疫を持っていても防げず、細胞性免疫が低下することで発症すると言われていました。最近この帯状疱疹が増えており、高齢化による細胞性免疫の低下や水痘ワクチンの定期接種化による水痘患者の減少が原因と言われていました。

日本では、宮崎県、小豆島で大規模な疫学調査が行われ、この20年間に罹患率は約70%増加し、女性に多く、50歳の方は80歳までに約30%の確率で発症すると報告されています。また水痘の定期接種導入後には20～50歳の若年層の増加が目立っています。ワクチンの導入で水痘の流行が減り、水痘患者との接触によるブースター効果が低下したことも一因ではないかと考えられています。

この帯状疱疹予防には有効なワクチンがあります。こどもの定期接種に用いられている水痘ワクチンは50歳以上の帯状疱疹に適応があり、発症を約50%、帯状疱疹後神経痛を約66%減少させると言われています。またもっと予防効果の高い不活化サブユニットワクチンも発売間近です。2017年CDCは帯状疱疹や関連合併症の予防には生ワクチンよりサブユニットワクチンのほうが望ましいと声明を出しており、早期の導入が待たれるところです。一生を通しての発生頻度が高いこと、帯状疱疹後神経痛はかなり痛いことなどから、自費になりますが、50歳を超える方は接種を検討されてはどうでしょうか？

ところで水痘のワクチンを接種したのに、水痘に感染したというお子さんが結構います。昨年のワクチン学会でも、小学校や保育園で流行し、濃厚接触した場合の予防効果について報告がありました。それによると、1回接種の予防効果は50%、2回では90%だそうです。このような修飾水痘は、発熱はないか軽く、水疱よりは斑状丘疹が中心で、発疹は50ヶ未満であり、診断が困難です。ただ感染力はありますので注意が必要です。このような施設内の流行も現在行われているこどもへの2回接種が徹底されることで減少していくと予想されます。

企画
編集

茨城県立こども病院広報委員会

〒311-4145 水戸市双葉台 3-3-1
TEL 029-254-1151 FAX 029-254-2382
URL <http://www.ibaraki-kodomo.com/>

発行
責任者

茨城県立こども病院

病院長 須磨崎 亮

2020/5/20 公開に際して、
一部修正を行っています。